

美術の遊びとところ VIII 五感で味わう日本の美術

三井記念美術館（日本橋） 24.07.02～09.01

本展は、日本の古美術や日本で需要されてきた東洋の古美術を楽しむことができる展覧会シリーズ「美術の遊びとところ」第8弾としての開催で、人間の五感を活かしつつ、絵画や工芸品に想像をめぐらせる展示を展開している。

作品に表現された花の香りや動物の鳴き声を想像したり、描かれた人物の気持ちに思いを寄せたり、あるいは美しい水辺の景色に涼を感じたりして、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの五感覚を研ぎ澄ませて、作品の声に耳を傾けて鑑賞をすれば、きっと新しい発見や驚きが見いだされることであろう。

円山応挙 《山水図襖》 紙本墨画 1765（明和2）年頃

南面の二面では、前景の岩から斜め後方へと墨色を薄くしながら水辺を描き、北面二面に見られる岩の凸凹は、幅広く長い墨線を上から下へと引いて“岩は岩らしく、水は流れゆくように”描かれている。



北面二面



南面二面



酒井抱一 《秋草に兎図》 部分

19世紀・江戸時代

4面の襖全面に、ごく薄い板（へぎ板）を斜めに貼り詰めて、その上に絵が描かれている。

満月の夜、強風にあおられる葛やススキが茂る草むらから、兎が勢いよく飛び出してきた一瞬を捉えたもので、襖の板を斜めに貼り板風に見立てた洒落た趣向の作品である。

他に、山口素絢（そけん） 《鬼図》 1800（寛政12）年

三井高福（たかよし） 《海辺群鶴図屏風》 1885（明治18）年などの展示。「